



孤独・孤立に関するフォーラム(7) 様々な課題への対応

見えづらい孤独・孤立 アディクションをめぐる現実

2021.9.28 特定非営利活動法人リカバリー(札幌) 大嶋 栄子

特定非営利活動法人リカバリー

- 2002年9月開設(2004年1月、NPOとして認証)
- さまざまな被害体験を背景に、精神的な疾患／障害を抱える人を支援の対象とする。「障害者総合支援法」に基づく4事業。
- ①安全な生活の場の提供、②社会参加の準備、③人とつながるための言葉の獲得、④社会に当事者の抱える困難を知らせる、という4つのミッションを掲げる。

利用する人たちの背景について

- 開設当初は女性のみを対象としていた。
- 被害体験の多くは、身近な人(家族をはじめとする親密な関係にある人、教員や同級生、職場の上司や同僚など)からの、暴力(身体的・心的・性的)である。
- 反復される被害体験により、人への基本的な信頼感への揺らぎ、生活の行き詰まりなどから、物質等への依存を深める。

自己治療としてのアディクション

- アディクションとは、初めはプラスの効果をもたらす物質・行為・関係が、やがて社会生活を脅かすことになって、自分でコントロール出来ない状態に陥ることを指す。
- アディクションは依存症という疾患よりもより広い概念。
- 緊張からの解放、フラッシュバックへの対処、強い悲しみの緩和剤として、さまざまなアディクションが使われている。



重なる孤立

- 居場所のなさ
- 人への不信
- 支えてくれるものの不在
- 経済的困窮
- 情報の欠如

困っていることを隠したい：スティグマ

- 自己責任という概念の内面化
- 自分の孤立を相対化する＝「こんなことぐらいで、しんどいと言ってはいけない」「もっと大変な人がいる」
- わたしはAL／くすり／パチンコを使うけれど、まだ依存症とよばれるほどひどくない
- 困っている自分を人に知られたくない：新たな排除への不安



生活支援共同体 役割と居場所

あたりまえの暮らしとはなにか

暮らしを自分の手に取り戻す

自分がそのままでいても良い居場所

共同体を支える多くの役割：互いの違いを認め
あう練習

既存の社会に再び自分の役割と居場所を見つけ
られるか



ふたつの世界を生きる：自助グループ

AA(アルコールリクス・アノニマス)

<https://aajapan.org>

- 無名のアルコールリクス(アルコールに問題を抱える当事者)による相互援助の活動。ミーティングと呼ばれる集会を中心として、ALを使わない生き方の継続を求める男女の集まり。
- 演者は現在、AAのA類(非当事者)常任理事。
- ミーティングでは、参加者が自分の体験を話し他者の体験に耳を傾ける。社会での立場や役割とは関係なく「ひとりの当事者」としてそこにいる。活動は献金とメンバーシップにより維持される。当事者の孤立化を防ぐ重要な役割。

社会的困難の多層性

- 私的領域(従来の親密圏:家族など)にケア役割を過剰に期待
- 公的領域が個人を支える場合、個人が情報にアクセスする必要がある：情報リテラシーから漏れる人たち：『わたしはダニエル・ブレイク』(byケン・ローチ/2017)
- ひとりの人間の生が困難に陥るとき、いくつもの不具合が時系列に重なり合う：As a whole：「全体性」という視点の希薄

ジェネラリストとスペシャリスト

- 社会的孤立の状況にある人へのアウトリーチ
- スティグマをはずす関わり：時間と回数
- その人の困難さを全体的に捉える：ジェネラリスト
- その人の困難さが際立つある課題に取り組む：スペシャリスト
- 社会からの孤立を深めていく人に対して、ジェネラリストとスペシャリストによるチームが必要

なにが領域横断を 可能にするのか

- アクションリサーチ：当事者の声を聞き、課題解決をめざす社会調査
- 領域相互に人材を交換育成
- 3年－5年を単位とした事業者へのgrant(財政)支援



文献

上岡陽江・大嶋栄子(2010)『その後の不自由』医学書院

大嶋栄子・特定非営利活動法人リカバリー(2015)『嵐のあとを生きる人たち』(かりん舎)

大嶋栄子(2019)『生き延びるためのアディクション』(金剛出版)

横山登志子・須藤八千代・大嶋栄子編著(2020)『ジェンダーからソーシャルワークを問う』(ヘウレーカ)

大嶋栄子(2021)編 特集：トラウマ／サバイバル 『臨床心理学』21巻第4号(金剛出版)